

〈研究プロジェクト活動報告〉

国際共同研究「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」

伊藤 るり、森本 恭代

国際共同研究「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」は、ジェンダー研究センターが2003年度より開始した新規プロジェクトである。主要メンバーには、本センターから舘かおる、伊藤るり、また学外から足立眞理子（大阪女子大学）、洪郁如（明星大学）、小檜山ルイ（東京女子大学）、バーバラ佐藤（成蹊大学）、牟田和恵（大阪大学）、国内研究協力者として宮城晴美（那覇市歴史資料室）、坂元ひろ子（一橋大学）、海外研究協力者としてタニ・バーロウ（米国・ワシントン大学）、ヴェラ・マッキー（豪州・カーティン工科大学）、戴錦華（中国・北京大学）、金恩實（韓国・梨花女子大学）、このほか大学院生を含む若手研究者が加わっている。なお、海外研究協力者のうち、金を除く三名はいずれも外国人客員教授としてセンターの研究活動を支えた経験をもち、金も2004年度には同様に客員教授として着任する予定である。

日本では「モガ」という呼称でなじまれている「モダンガール」は、従来、1920年代から30年代にかけて、都市大衆消費文化の形成とともに登場した社会現象の一環とみなされてきた。「モガ」は「モボ」とともに、都市に特有の新奇な風俗の担い手として、また舶来製品をはじめとする新しい消費財や嗜好を受け入れる層として位置づけられてきた。つまり、日本の歴史過程の中に埋め込まれた、時代的産物と見なされてきたのである。

こうした既存の考え方に対して、本プロジェクトの特徴は、「モガ」現象を単に一国内にとどまらない、国際的な社会現象として捉え直そうとする点にある。このことは、日本の都市消費文化の特徴や歴史・時代論的枠組みにとどまらない、グローバルな資本と植民地支配の展開へと議論を接合する側面をもつ。「モガ」を東アジアの植民地的近代（colonial modernity）の問題構制のもとに位置づけることで、植民地的近代とはいかなるものか、そして、植民地的近代とジェンダー／セクシュアリティとがいかなる関係性を帯びているかといった諸点も明らかにしていくことができよう。

なお、「モダンガール」研究の先行研究としては、ワシントン大学の共同研究プロジェクト“Modern Girl Around the World”がある。1999年に発足し、すでに5年の活動実績をもつこの共同研究は、海外研究協力者として本プロジェクトにも参加するタニ・バーロウ（近現代中国思想史）のほかに、ウタ・ポイガー（現代ドイツ史、文化研究）、リン・トーマス（近現代アフリカ史）、プリティ・ラママーシー（インド政治経済）、董玥（近現代中国史）、アリス・ワインbaum（英米文学、アメリカ研究）の総勢6名からなり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、そして米国におけるモダンガールの歴史を追跡して



いる（ウェブサイト <http://depts.washington.edu/its/moderngirl.htm> を参照）。その研究方法の特色は、モダンガールを特徴づける化粧品、服、シガレット、ボブヘア、パーマメントといったファッションなど、ジェンダー化された国際的商品のフローを複数の地点でたどり、これらの商品とその背後にあるグローバル資本の市場戦略を明らかにすることによって、モダンガールのいわば「インフラ」となる政治経済の諸過程を把握する点にある。“garçottes”（フランス）、“flappers”（米国）、「近代小姐」（北京）、「モガ」（東京）、“schoolgirls”（ケニア）、“neue Frauen”（ドイツ）、これらは、「グローバリゼーション」ということばが誕生する以前の「グローバリゼーション」の問題として位置づけられているのである。

これに対して、本研究プロジェクトは、たとえば足立が取り組んでいる資生堂の企業戦略の分析など、ワシントン大学チームの「グローバリゼーション」に関する問題意識を共有する一方で、他方では「モダンガール」現象を全地球的というよりは、むしろ東アジア（主に日本、朝鮮、中国、台湾、沖縄）という地域のなかで捉え、その植民地的近代の展開とのかかわりで解明することをめざしている。1920年代、30年代日本の都市部大衆消費文化の形成とともに出現した「モガ」を、同時代の「近代小姐」（北京）、「摩登小姐」（上海）、「黒猫」（台湾）といった東アジア地域の類似現象と関連づけ、その中に出現する〈女性〉主体が当時の植民地の複層的な支配—被支配構造のなかでどのような位置を占めていたのか、また、当時、「新しい女」、あるいは「新女性」と呼ばれた、いまひとつの近代的〈女性〉主体との関係はどのようなものか——これらの点を各地域のさまざまな資料（新聞、雑誌、広告、映画等）にあたりながら検討しつつある。

なお本プロジェクトは、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）を2003年度より4年間にわたって受けることが決まった（研究課題名「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」、研究代表者：館かおる）。このことにより、海外での調査研究活動を本格的に展開し、ワシントン大学チームと密接な交流を進めることが可能となっている。また、通称「モガ研究会」をこれまでに5回開催し、海外研究協力者3名を招聘した合宿を1回開催することができた。

過去の研究会では、日本のミッションスクールにおける「奥様」教育（小檜山）、日本における女性の喫煙規範の展開（館）、戦前の消費文化の台頭と「モガ」イメージ（佐藤）、植民地統治下台湾におけるファッションを通じて見る二つの近代（東京と上海）と階層的差異化の問題（洪）、中国における「新婦女」をめぐる男性知識人の言説分析（何瑋、お茶の水女子大学大学院博士後期課程）、都市化の黎明期における百貨店と「デパートガール」の社会史（玉利智子、ノッティンガム・トレント大学）、スペインにおける女性の「断髪」と衛生をめぐる言説分析（磯山久美子、お茶の水女子大学大学院博士後期課程）などについて検討がなされた。また、2003年12月に静岡県掛川市で開かれた合宿では、日本における「新しい女」と「モガ」という二つの像、概念の関係（牟田）、日本の風刺漫画におけるモガの身体（マッキー）、沖縄の近代における〈女性〉主体の諸問題（宮城）、戦後沖縄の女性向け雑誌『沖縄婦人之友』に関する予備的考察（伊藤）、1930年代広州における都市部サービス雇用への女性労働者の参入と美の消費（アンジェリーナ・チン、カリフォルニア大学サンタクルス校 Ph.D candidate）、中国における〈近代〉の異なる意味とモダンガール（戴）、中国における優生学的女性、半植民地主義、植民地的近代（バーロウ）、以上7本の報告がなされた。また、最後のバーロウ報告に対しては、本プロジェクトにとってのキー概念でもある「植民地的近代」に関して、中国の文脈でこれを考えることの有効性、さらに「半植民地主義」という概念に関する問題提起が坂元からなされた（2003年度活動記録については、本号末尾



の彙報を参照のこと)。

なお、本プロジェクトでは2004年9月下旬に、ワシントン大学チームとの共同で、国際ワークショップ「アジアにおけるモダンガールと〈世界〉——グローバル資本・植民地的近代・メディア表象——」を開催する予定である。合計16本のペーパーが発表されるこのワークショップでは、モダンガール研究の方法論や理論的な枠組に関する興味深い意見交換がなされるだろう。また、ワークショップの3日目には、若手研究者への支援を目的とした、国内外の大学院生によるセッションも企画している。

(いとう・るり／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授、
もりもと・やすよ／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究協力員)